

池内靖子著『女優の誕生と終焉—パフォーマンスとジェンダー』をめぐって

森山直人

この書物は、タイトルから想像されるような「女優」の歴史ではない。たとえば、水谷八重子や杉村春子のような、日本の近代劇の歴史を語る上では欠かせない名前さえ、ここに登場することはないからだ。この書物の特長は、「女優」というまぎれもない近代的な現象を、一貫して「演劇」という制度の外部から考察しているところにある。いいかえれば、水谷八重子や杉村春子が登場しないことによって明らかになる、国家と舞台芸術と女性の関係性をめぐる歴史がたしかに存在するということだ。

したがって、本書が「女優」をめぐる網羅的な「通史」になっていないことこそが、日本演劇の研究者にはけっしてなしえなかった本書の重要な側面である。そのかわりに、国家と舞台芸術と女性の関係性という視点から、著者は、明治から今日まで、ひとつの視野のなかで語り切ってみせる。そのことの意味は決して小さくない。厳密な意味では通史と言えなくても、ひとつの「歴史」としての体裁を備えていることで、日本の近現代演劇研究者は、この書物を無視することができなくなるからだ。（それでも無視しようとする人はいるだろうが）。私は、日本の近現代演劇をめぐる批評にかかわる人間だが、多くのこの分野の研究者は、いまだに「日本」や「演劇」といった枠組みの自明性を疑おうとはせず、日本という近代国家において、近代にふさわしい演劇がいかに確立されていったか、ということだけを、ひたすら記述しようとする。結果として、そうした研究の多くは、あまりに従来的な演劇や文化の枠組みにとどまっているために、そうした枠組みから逃れ、新しい舞台芸術の活用法を模索しようとする今日の先端的な創造現場の試みから、ともすれば乖離してしまいがちである。本書は、そうした枠組みから自由であることによって、かえって今日の新しい現代演劇やパフォーマンスの試みと接続する可能性を保持しているといえるのである。

本書は、すでに一部の日本近現代演劇研究者の感情的な反発を呼び覚ましているようだが、そうした研究者のほとんどは、「日本」も「演劇」も、「近代化」の過程でたえずその自明性が揺らぎ、危機にさらされてきたことをまったく視野に入れていない。たとえば、著者は、近代日本の最初の本格的な女優として扱われてきた松井須磨子が、同時代のジャーナリズムや教育関係者によって、いかに口汚く罵られてきたかを、宮武外骨の「スコブル」などの図版などを引用しながら語っていく。従来の演劇研究者にとって、それらは結局のところ、「伝説の女優」にまつわるただのエピソードでしかない。けれども本書は、こうした側面を、たとえば演技の巧拙などといった問題とは別に、「女優」という「近代」が移植されたときの、ジェンダーをめぐる場の傾きや歪みのような、一種の構造の問題として分析しようとしているのである。その結果、松井須磨子は、ある特定の地域と時代の問題を越え、近代と舞台芸術とジェンダーの接点において、さまざまな国や時代に生じる構造的な問題として、再度設定されることになる。

たとえば私自身は、この書物の松井のエピソードを読んで、近年、韓国における若い女優の相次ぐ自殺のことを思い起こしたが、同種の問題は、「近代」そのものが抱え込んでいるものであることを示唆しているといえるように思う。

1960年代から70年代における日本の現代演劇は、いわゆるアンダーグラウンド演劇（アンゲラ）の隆盛によって、もっとも生産的な一時期であったとされる一方、ナラティブにおける女性の地位や、劇団内部における男性演出家と女優の関係といったジェンダー的な視点からは、批判すべき点が多い時代でもある（ちょうど同時代の新左翼運動の内実がそうであったように）。第二部で著者は、「阿部定」という神話的形象との関連から、この時代のリーダー的演劇作家であった佐藤信と鈴木忠志の実践を、一種の「言説生産」の観点から比較分析していて興味深い。同じ章における、寺山修司に関する評価の仕方にはやや説得力を欠く部分も感じられるが、多分に男性的な視点から構成された日本の1960年代という神話を、その外部にたって再検討していることの意味は大きい。

けれども、ある意味ではそれ以上にこの書物の特長は、第三部に現われているように思われる。ここで著者は、伝統的な狭義の演劇の枠を踏み越え、さまざまな点で、先端的な舞台芸術の生産の現場に、これまでの歴史分析を接続しようとする。故古橋悌二のダムタイプ、イトー・ターリ、劇団態変の金満里といったアーティストがそれである。おそらく、従来の「女優」の通史を書くという立場からはおよそ想像もつかなかったようなこうした名前が、逆に、これまでの日本近現代演劇史が何を見ないことにして成立してきたかを明るみにだしている。

おそらくこうした分析の視座は、本書ではひとまずとりあげられていない外国のアーティスト——たとえばピナ・バウシュやローリー・アンダーソン、マリーナ・アブラモビッチのような——の創造現場と繋がる可能性をもっている。本書は「日本」に限定されていたが、いずれより世界的な文脈と接続する形で、もういちどこで取り上げられている作家たちの活動を見直してみたいと思う。

※この文章は、当日発表した内容をふまえつつ、新たに加筆した部分があることをお断りしておきます。